みちのく

成 人 編

－第４１号－

令和２年度刊
仙台矯正管区

刊行のことば

本誌は、昭和五十六年の創刊号以来毎年刊行し、本号で四十一号を数えております。

当管区では「みちのく書画文芸コンクール」を開催しており、本誌には、同コンクールに応募した、当管区管内刑事施設の受刑者の書画作品及び文芸作品のうち、各分野で御活躍の先生方の審査により入賞した作品を掲載いたしましたので、ご覧ください。

令和三年三月

仙台矯正管区

表紙の題字は久道石静氏の揮毫によるものです。

目次

【文芸部門入賞作品】
作文・・・・・・・・・・・・・・・・2
【選評】原田勇男 先生
詩苑・・・・・・・・・・・・・・・・19
【選評】原田勇男 先生
歌壇・・・・・・・・・・・・・・・・26
【選評】伊藤久子 先生
俳壇・・・・・・・・・・・・・・・・32
【選評】鈴木三山 先生
柳壇・・・・・・・・・・・・・・・・36
【選評】佐藤岩男 先生

【書画部門入賞作品】
絵画・・・・・・・・・・・・・・・・39
【選評】枡澤 怜 先生
ポスター・カレンダー・・・・・・・・43
【選評】鈴木智枝 先生
毛筆・・・・・・・・・・・・・・・・45
【選評】鈴木霽月 先生
硬筆・・・・・・・・・・・・・・・・49
【選評】鈴木霽月 先生
書画部門審査総評・・・・・・・・・・52

《作　文》

金　賞

くもと青空

山形刑務所　龍齋

辰史はコンビニから出てすぐに店の前においてあるベンチに腰かけ、レジ袋の中から買ったばかりのセブンスターを取り出した。

しげしげとそのパッケージを眺める。若い頃からずっと吸っていた銘柄だが、手に取ったのはもう十数年ぶりだった。

辰史は今朝、出所したばかりだ。十五年という刑期を終え、買い物すら久々だった。

何年ぶりのたばこだろうか…。そう思いながら、自分の肺のことも少しばかり慮る。

俺の肺の中はもうきれいなのだろうか。長い間たばこを断っていたのだから少しはきれいになっているのかもしれない。

いっそこのままたばこをやめようか…。

辰史がパッケージとにらめっこしていると、鞠を転がすような少女の歌声が近づいて来た。

そちらに目を向けると五歳くらいのおさげの女の子が、母親と思しい若い女性に手を引かれてやって来るのが見えた。

二人は一緒に聴き覚えのあるアニメソングを歌いながら、狭い歩道を楽しげに歩いてる。

こちらにやって来るピンクのジャンパーを着たその子が、自分の娘と重なって見えた。

辰史にも娘がいる。別れた妻との間にできたひとり娘だ。妻と別れた当時は、丁度同じ年頃の五歳だった。

すぐ近くまで二人が来ると、女の子がふいに母親の手を離れて駆け出した。

「みよちゃん、そんなに走ると危ないよ」

女の子は母親の声も聞こえていないかのように辰史の目の前を駆け抜け、そのまま脱兎の如くコンビニの中へ飛び込んで行った。

微笑み混じりに無邪気な女の子の仕草を目で追っていると、後から来た母親が辰史を一瞥して店の中へと入って行った。辰史にはその目が心なしか冷ややかなものに感じられた。

元妻の顔を思い出す。別れることになった時のあの冷たい目。

離婚しなければならなくなったのは仕方ないと思う。その方がお互いのためでもあった。だが娘と別れなければならないのは辰史にとって大きな痛手だった。娘は可愛かった。

離婚してからも月に一度は娘と会っていたが、その時に満面の笑みを湛えながら駆け寄ってくる娘を見る度、余計に愛しさが募った。

しかし徐々に娘と会える機会は減らされて、仕事でも上手くいかなくなり、パチンコ等のギャンブルでお金に困った辰史は遂に悪事に手を染めるようになっていった。

初めはコソコソとやっていた小さな犯行も、次第にエスカレートして平気で他人を傷つけ金品を奪うまでになっていった。そして相手に重傷を負わせる事件を起こし、逮捕されるに至ったのである。

逮捕後は疎遠になっていた娘と会える機会は皆無となった。それも当然のことだろう。

長い受刑生活の中で、娘や元妻とは面会はおろか手紙のやり取りすら一度もしなかった。逮捕された当初に一通だけ元妻宛てに手紙を出してみたが、返信されなかったからだ。

辛く淋しい孤独な受刑生活が続いた。だがそれでよかった。こんな姿を娘に見せたくなかったからだ。父親が犯罪者だなんて周りに知られるだけで肩身の狭い思いをするだろう。それを考慮しての元妻の判断だったに違いない。

この孤独もひっくるめて罰なのだと辰史は思った。自分の欲まかせで生きてきた罰だと。

毎年の娘の誕生日には、少しずつ背丈が伸びて大きくなった娘を思い描いて過ごした。

そして十五年という年月が経ち、身元引受人がいない辰史は満期での出所となった。

娘も今は二十歳のはず。成人していったいどんな姿へと成長したのだろうか…。

しかし娘とすぐに再会などできるはずもなかった。前科者というだけでなく、まだ勤め先も決まっていないあてのない身だからだ。

出所間近に就労支援で勤め先を探したが、結局決まらずにそのまま出所することとなった。やはり一番働き盛りだった年齢を刑務所で過ごしてしまったのが痛いところだった。

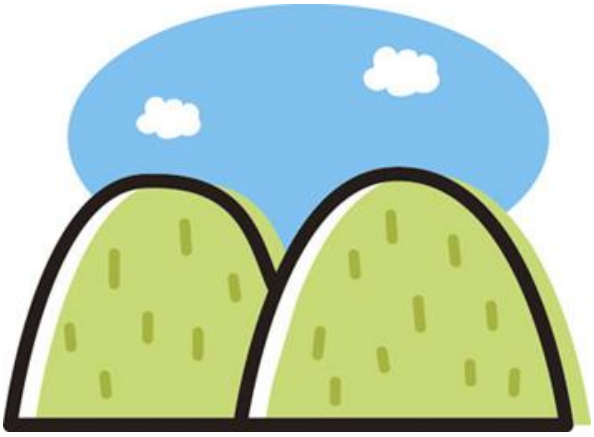
もう齢五十を出た男に、今更いったい何ができ

るというのだろうか…。
　こんな無職のあてのない男が突然目の前に現れたら、娘はいったいどう思うのか…。
　辰史はやりきれなくなって深い溜め息をつき、またたばこのパッケージへ目を落とした。そして無言のうちに封を切る。
一本くらいいいだろう…。
セブンスターを一本だけ取り出しかけた時、すぐ横の入り口のドアが開いて、また女の子の元気な声が響いて来た。
　女の子は母親に好きなお菓子でも買ってもらったのか、わあっと嬉しそうな声を上げて入り口から駆け出した。
　その時、辰史の耳に急速に近づいてくるバイクの音が飛び込んだ。女の子が駆けて行く道の方からだ。女の子は気づいていない。
「あぶないっ！」
　叫ぶよりも先に体が動いた。女の子に追いつき抱き留めると同時に、猛スピードで走り抜けるバイクのミラーが辰史の肩をかすめた。
　バイクは気づいたのか気づかなかったのか、そのままスピードを落とさずに走り去っていく。
　女の子は無事だった。突然の事でびっくりしているのか、その体は少し震えている。
「みよちゃん！」
　母親が声を上げて店から飛んで来た。
「道路に飛び出しちゃダメでしょ！」
　母親に叱られたからか、ほっとしたためか、女の子は声を上げて泣き出した。
　辰史はしゃくり上げる女の子を、そのまま母親の腕の中へと譲り渡した。
「すみません。ありがとうございました」
「いえ…」
　辰史は照れくさくなって苦笑いした。母親の目には先の冷たさはかけらもなかった。
「おケガとかされませんでしたか？」
「全然何ともありません」
「よかった。何かお礼しなくちゃ…」
　辰史は母親の申し出を、たまたま居合わせただけだからと丁重に断わった。
「ほら、みよちゃんもお礼を言って」
　女の子は目は濡れてるがもう泣き止んでる。
「おじちゃん、どうもありがとう…」
　円らな瞳を上目遣いにたどたどしいお礼の言葉を言う女の子を見て、辰史の胸の奥に温かな光が灯ったようだった。
「お嬢ちゃん、もう道路に飛び出しちゃ駄目だぞ。ママの言うことをよく守ってね」
　辰史の言葉に女の子はこくんと頷いた。
　大人の掌で隠れてしまいそうなくらい小さな頭を撫でてあげると、女の子はくすぐったそうにはにかんだ。
「それじゃ失礼させていただきます。本当にありがとうございました」
　母親が丁寧なお辞儀をして、女の子と一緒に来た道を帰って行った。
　辰史が二人の後ろ姿を温かい気持ちで見てると、ふいに振り向いた女の子と目が合った。
「おじちゃん、バイバーイ」
　女の子が満面の笑みで手を振った。
　辰史も思わず手を振り返していた。
　母親がまた会釈して二人は去って行き、辰史はその姿が見えなくなるまで見送った。
　辰史は今までにない幸福感に包まれていた。
　俺にもまだ、できることがあるじゃないか。
　辰史の顔にも笑みが広がっている。
　他人の役に立てることがこんなにも気持ちのいいことだったなんて、どうして今まで気づけなかったのだろう。
　辰史は今までの己を心の内で振り返った。しかし今のように他人に感謝された事が思い浮かばなかったばかりか、これまでの日々を無駄に過ごしてしまっていたことに気づいた。
　俺はなんてもったいない生き方をしていたのか。今まで自分のことしか考えてなかった。その分これからは他人のために生きてみるのもいいかもしれない…。今更だが、手遅れってわけじゃない。ここからまだ先はある。
　仕事だって選り好みしなきゃあるだろう。何だっていい。やってやろうじゃないか。
　そして本当に困っている人がいた時に手を差し伸べられる人になろう。そうしていればいつか娘があの日のように笑いかけてくれる日が来るかもしれない。きっといつの日か…。
　辰史はベンチに戻って置きっぱなしのたばこを手に取った。そしてパッケージをもう一度よく眺めると、買ったばかりのそれをゴミ箱の中へと放った。ためらいはなかった。
　レジ袋だけを手にすると辰史は歩きだした。まだ高い陽の光が辰史の顔に降りそそぐ。

空を見上げると小さな白い雲が、ゆっくりと気持ち良さそうに流れていた。辰史はその流れに身を任せ、前を向き一歩を踏み出した。その歩みにもう迷いはない。

今のこの気持ちを忘れずに生きていこう。

空はどこまでも果てしない青だった。



銀賞

生きる　～一心白道～

青森刑務所　　鳴寂

この物語を、天国で眠る兄に捧ぐ…

彼との出会いは、「自分で自分を褒めてあげたい」と涙の名言を発したマラソンランナーが、五輪メダリストとなった暑い夏の日の夜であった。熱めのコーヒー片手に、録画した表彰式を見ていた時、チャイムが鳴った。

「隣に入居しました有森と申します」

筋肉質の、それでいてスマートな、一目で高級とわかるスーツを身に付けた紳士。隣が空室だった事を思い出しながらも、そのタイミングの良さに笑いを抑える事ができなかった。無礼千万とは正にこの事だろう。

「どうかしましたか？」紳士が首を傾げた。

「失礼致しました。実は今日、貴方と同じ姓の方がマラソンでメダルを取りまして」

私達は顔を見合わせて笑い合った。

私の人生にとって、かけがえのない出会いとなる事を、この時は知る由もなかった。

当時、私は大手音楽レーベルの社員として仕事漬けの日々を送っていた。バブルが弾け、日本経済が空前の負に喘ぐ中、所属する会社は上昇一途であった。所謂T・Kバブルである。ドラマにCMに、現在は押しも押されぬ大女優R・S、沖縄が生んだ国民的歌姫N・A、グルーヴを発信したT○F、E○T、秘蔵っ子T・K…枚挙にいとまがない。

部屋にはただ帰って眠るだけ。大好きな猫を飼う事もできず、全てを仕事に捧げる事ができたのは、何よりも沢山のアーティストに関わる事ができたからだ。訪れる毎日を、一分一秒を創り出す事に必死であった。

夏が過ぎ、秋風を心地よく感じたある日の夜半、何かの物音で目を覚ました。何かが…いる。ベッド脇のライトを恐る恐る点けると、そこに一匹の黒猫がいた。逃げもせず、「ニャー」と鳴いている。起き上がり近づくと、逃げるどころか擦り寄って来る。冷蔵庫から牛乳を取り出し皿に空けると、勢い良く舐め始めた。泥棒ではなく黒猫…。やがて満足したのか「ニャー」と一声を発して、開けていたベランダの窓から姿を消した。しかし、まさかその数日後、自宅アパート前の夜の公園で再び出会う事になろうとは。そして、夜の侵入者を散歩させていたのが、あろうことか隣室の紳士だったとは…。夜空にぽっかりと浮かんだ満月の下、二人と一匹は公園のベンチに座り、楽しい一時を過ごした。

〝哲さん〟は私より十歳年上で独身、出身は長野県、都内の金融機関で勤務している。若い頃料理人を目指していたが、不注意で左小指を負傷し、その道を断念した事、鰻が大好きなこと、黒猫は鈴（りん、メス七歳）と言い、大雨の日に捨てられていたのを連れ帰って来た事、天気のいい日はベランダの小窓から出入りしている事などを教えてくれた。

その鈴は、私にとって縁結び、そして弁財天兼任の神猫となった。私がこの年のクリスマス、広報室長に昇進したからだ。哲さんは何と銀座の超一流鮨店でお祝いをしてくれた。

しかし、広報室長となりメディアへの対応や雑誌の取材、他レーベルとの企画打ち合わせ等で接待の回数も自然と増えていく中で、業界最年少の広報室長と持て囃され、自身を見失うのは必然であったのか…私は六本木のクラブに在籍する女性と親密になり、やがて一線を越えてしまう。この事が、私を窮地に追い込む事になる。桜が花開く頃の一本の電話からすべては始まった。

私の目の前には、彼女と一人の男がいた。男は明らかに常人とは違うオーラを発していた。眼光鋭く、そしてこう言った。

「彼女は私の女です。彼女は妊娠しています。勿論意味は分かりますね。彼女は全てを認めています」恐れが体中を駆け巡った

「あなたもそれなりの地位にあるならば、責任を取ってもらわなければ」…私には、男からの要求を受け入れるしか道は無かった。茫然自失の体で、カフェを後にした…。

土曜日の仕事帰り、新橋のサウナに寄った。全てを忘れたかった。サウナ・冷水の交代浴を終え、再びサウナに戻ると一人の男性が座っていた。互いの視線が交錯した。

「明…か！？」　「哲兄ィ…！？」

私と同様、哲兄ィも明らかに戸惑っていた。私の目は、その姿を捉えては放さなかった。極彩色の、

まるで錦絵の様な刺青…。
「これは水滸伝で描かれている九紋龍史進と言うんだ。けれど、まさかこんなところでバレるとはな…」と言い、苦笑いをした。確かに九匹の龍が紅蓮の炎の中でうねり、暴れているように見える。そして、若き頃人を傷付けて服役した事、小指や刺青の事、会社は世に言う高利金融である事を告白した。
「幻滅しただろ…ごめんな」
幻滅する理由など無かった。私は首を振った。
「明、昨日お前の部屋に二人の男が来ていたけど知り合いか？」私はハッと息を呑んだ。昨日、ドアポストに手紙が入っていたのだ。私の逡巡を哲兄ィは見逃さなかった。そして、
「何か困っているのか？話してみろ。力になれるかも知れないから」と言い、階上の居酒屋へ誘った。私は、その出来事を告白した。
「そんな事があったとはな…」哲兄ィはそう言って項垂れる私の肩をポンと叩いた。
「心配するな。俺に任せろ。蛇の道はへびって言うだろ。お前はかわいい弟だからな」
暖かな言葉が心の琴線に触れる。涙が溢れた。
「うまいな！！」後日、浅草の鰻の名店に哲兄ィを誘った。二人で舌鼓を打ちながらも、私は例の件を哲兄ィに尋ねてはみたのだが、
「知らぬが仏という事もあるぞ」と一笑に付され、それきりこの話は打ち切りとなった。夕暮れ時の隅田川を見つめる哲兄ィの横顔が、心なしか憂いを帯びているかの様に感じた。
「哲兄ィ、何かあった？話してみてよ。蛇の道はへびとも言うし」哲兄ィはまじまじと私を見て、そして大笑いをした。
出会いから一年が過ぎた。キャンペーンで全国を飛び回り、落ち葉が音を奏でる十一月初旬、三ヶ月ぶりに自宅に戻った。哲兄ィは何時に戻るかな？そう思いながら、ポストから郵便物を取り出した。一通の手紙があった。
〝明…申し訳ない。帰りを待ちたかったが、顔を見れば別れが辛くなる。許してくれ。時間はかかるけど待っていてくれ。必ず戻るから。こんな兄でごめん。ちゃんと食べて、無茶はするなよ。いつも見守っている。哲〟
一人きりの孤独な心に、雨音が悲しく響いた。
私は今まで以上に仕事に邁進した。後にカリスマ歌姫と呼ばれるH・Aを売り出す為、広報としての力量が問われる大事な時期だった。仕事を中断し、屋上へ上がる。不意に目の前を一筋の流星が過ぎった。哲兄ィが平穏無事でありますように…私は祈った。
三度季節は巡り。二〇〇〇年になる瞬間を自宅で迎えた。巷で噂の電子機器の異常は一切起きなかった。夕方、一通の電報が届いた。私を奈落の底へ突き落とす知らせであった。
仏壇の位牌と変わらない笑顔…。
「明さんには弱った姿を見られたくなかったのでしょう」白血病と複数の癌を併発しながらもボランティアに励み、その後三年の闘病生活の末に亡くなった事を、妹の華さんが教えてくれた。私は彼女から、手のひらサイズの小箱を受け取った。
〝明へ〟
元気でやっているか？この手紙を読んだという事は、俺が旅立ったのがバレたという事だな。最後までこんな兄でごめんな。俺はお前に会えて良かった。こんな俺に生きる意味を与えてくれたから。そして、お前のお陰で妹の命も救う事が出来た。感謝しかない。遅くなったけど返済します。高利貸しの俺が言うのも何だけど、残りは利息だから。明…俺の分まで生きろ。いつでも、いつまでも、お前の事を見守っている。ありがとう。
哲
小箱の中には現金と、一枚の写真…。
背中に彫られた九紋龍史進、そして〝一心白道〟の文字。その証を私に残し、哲兄ィは永遠に生き続ける。感慨に耽ける私の前に鈴がやって来て、「ニャー」と甘えてくれた。…。
「有り難うございました。」と言った華さんに涙は無かった。笑顔に確かな面影を感じた。
その後、鈴を引き取って一緒に暮らした。三年後の春、鈴は旅立った。諏訪湖を見下ろす高台の墓地。哲兄ィと一緒だからいいよな、鈴…。哲兄ィからは沢山のことを学んだ。生きよう！希望に起き、努力に生き、感謝に眠ろう。これが私にとっての〝一心白道〟だ。純白の蝶が二羽、戯れあうようにヒラリフワリと飛び回り。やがて私の肩に止まった。何かを伝えるかのように…。春爛

漫の陽光の下、やがて二羽は飛び立った。私はその姿をいつまでも見続けていた。

銅賞

再会

宮城刑務所　力風

早朝、待ち合わせの駐車場にいつものメンバーがひとり、またひとりと集まってきた。

結衣は必要な荷物をミニバン後部のスペースに丁寧に積み込んでいく。忘れ物はーと点検しているとうしろから肩をたたかれた。

「おはよう。今回来てくれたボランティア三人のうち、二人を結衣さんの方で頼むよ」

常駐しているだけでここに集まる全員が同じボランティアなのだが、この活動のリーダー山下にわかったと結衣は頷く。それから山下はテキパキと常駐組のメンバーと今日から加わる三名を三つの班へと分けていき、それぞれが決められた班へと別れていった。

今日結衣が一日共に行動するメンバーは、運転手役として地元大学生―休学中―の横山勇斗、今回が初めての参加で一週間の滞在予定だという神奈川の厚木から来た三十代主婦大島優美、同じく初めての参加で結衣のアップしているＳＮＳを見て連絡をして富山から来た四十代主婦渡辺麻代、それに結衣を加えた四人だ。

事故から半年が経ち、やっと結衣たちの活動がネットを通して全国に広まるようになり、活動に興味を持つ人たちが増えてきた。

「じゃあ、各班いつものように裏道から立入り禁止区域に入ります。パトロールカーには十分気をつけて活動してください。

山下の一言に皆が顔を引き締める。

立入禁止区域――そう、結衣たちがこれから向かう場所は東日本大震災による原発事故で封鎖された避難区域。当然区域内は無人でゴーストタウン化しているのだが、区域内には飼い主に置いていかれた犬や猫のペットや家畜が残されている。結衣たちはネットでペットの保護を訴えていた山下に賛同して集まったボランティアである。ただし、合法ではない。どこに話を持っていってもペット保護で禁止区域へ入る許可が得られないため、仕方なく結衣たちは非合法で活動するようになった。国道や県道を使って区域内に入ろうとすると警察の検問に引っ掛かるので、地元住民しか使わない山道や農道を通って進入する。もちろん進入後も注意して大きい道路は使わない。これまで三度、空き巣警戒中のパトロールカーに見つかったが、こっぴどく叱られた上で禁止区域の外へ出されるだけで逮捕されることはなかった。ただ一日が無駄になった。

三班に別れた車はそれぞれに受け持つ地区へと散っていった。結衣たちはまず飼い主たちからの依頼があった猫四匹の保護と二匹の餌やりのための目的地へと向かうことにする。

いざ車を動かすと非合法活動への緊張からか、優美が冗舌になり勇斗へあれこれと質問している。地元の勇斗は受け答えをしながらも馴れたハンドル捌きで山道へと車を走らせ、結衣は流れる景色を見つめあくびをした。

見知っているはずの町が半年離れていただけで全く別の町に変わってしまった…。

麻代はゴーストタウンと化した町と手入れの行き届いていない雑草に埋もれる家々を見て驚き、そして悲しくなった。

半年前に避難区域に指定された時、麻代も夫もすぐに戻ってこられると軽く考えていた。

渡辺家で飼っていた雑種犬のケン五歳は人懐っこく甘えん坊で、全く番犬には適さない駄目犬だったが、家族皆から愛されていた。避難先が富山の親戚が経営するアパートだったため、ケンを連れていくことが出来ず、泣く泣く首輪を外して放してやったのだ。家族が引っ越す日、いつまでも車を追いかけてくるケンを麻代は見ていられなかった。

ケンと離れて一番悲しみ、今も落ち込んでいるのは小五のすずだ。すずはケンがまだ赤ん坊の頃から可愛がり、散歩をして、芸を教え、一緒に育ってきた姉弟のような間柄だった。麻代はすずが夜な夜な涙を流し悲しんでいることを知っている。どうにかならないものかと夫や義母に相談すると、義母が義母の姉にあたる親戚の大家と掛け合ってくれて、アパートの住人の許可を自分たちで取ってくれれば、アパートの敷地内で犬を飼うことを認めると折れてくれた。

そうなると後はケンを迎えに福島へ行けばいいのだが、放してしまったケンはどこにいるのか、見つけられるのかが心配だった。

とりあえず福島へ行ってからケンを探す方法を

みつけようと考えていたとき、スマホを操作していた夫が「アッ！」と声をあげ、麻代を手招きして呼んだ。

何事かと夫のスマホを覗いてみると、雑草の伸びた我が家の庭に痩せて警戒してる様子のケンが画面に写っている。麻代は驚き、これは何なのかと夫に聞くも、避難区域内に潜入して残されたペットの保護活動をしている人たちによるサイトなのだと言う。

麻代はそこからメンバーの結衣を探しだし、事情を伝えケンを迎えに行きたいのだと、結衣のSNSにメッセージを送った。すぐに返信があり、細かい段取りを決めて今日に至る。

福島へ戻ってきたのは麻代ひとりだった。夫は仕事があるし、すずも夏休みが終わり学校がはじまっている。なので家のことは義母にお願いして麻代が代表で来たのだ。

それにしても人が半年いなくなっただけで、こんなにも町は変わるものなのかー麻代は後部席の窓から目が離せない。

車の後部スペースでは先程保護したばかりの黒猫と茶トラの二匹がカゴの中で大人しくしている。飼い主から家の鍵を預かっていた結衣が玄関の扉を開けると、無人の家の中に何かがいるという気配を感じた。中に入るとすごい獣臭がして、玄関からもう家の中が荒れ放題で汚れているのがわかった。肝心の猫は二匹とも居間で見つかったが、近づいて捕まえようとしてもすばしっこく逃げ回った。それでも何とか車に残る勇斗を除いた三人で居間に続く和室へと猫を追い込めて保護したのだ。家のどこかに猫の出入口があるのか、猫は痩せているようには見えなかった。

「あと二か所依頼のあった場所を回ったら、渡辺さんの自宅のケンくんを迎えに行きましょう。あのコはいつもどこかへ出掛けているのか午前中はほとんど会えないんです」

結衣が助手席から麻代に声をかける。結衣は半年前からケンを知っていて、何度も保護しようと渡辺家に出向いていたが、ケンは警戒して庭の奥へ隠れてしまうらしかった。結衣はその度にドッグフードをエサ皿に置いてきてくれたが、毎日というわけにはいかなかったから痩せてしまったのだと麻代に謝った。それでも麻代は結衣に感謝している。

次の家に着いたところで結衣の電話に着信があり、一言二言のやりとりで通話を終えると、山下の班がパトロールカーに見つかって禁止区域の外に出されたと勇斗に言った。

家の前の道を、小さな群れの野良牛が呑気にモォーと鳴き通り過ぎていく。

ケンはその様子を家の庇の下に寝そべり眺めていた。空腹で動きたくない。

あの日を境に誰もこの家には帰ってこない。最後の日、大好きなすずが涙を流して撫でてくれ、お母さんは食べきれない程のごはんを置き、お父さんは首輪を外してくれた。よくわからないけど、自由になったケンは走り回って皆にワンとお礼を言った。でもすずが最後に「バイバイ」と言って車に乗った。何だか不安になったケンは皆の乗る車を追いかけた。（行かないで）と吠えながらどこまでも追いかけた。どこまでも…どこまでも…。

はじめのうちは家の前を動けず哭いていた。何日かするとケンは自由に歩き回る犬や猫や牛に豚といった動物たちの姿に気づいた。食べるものを探す者、飼い主を探す者、ただ自由に散策している者、理由は様々だ。

ケンも動きはじめた。すずといつも散歩に行くコースをまずは歩いてみる。途中に川があるのでそこで水を飲んだ。おばあちゃんの畑にも足をのばす。もちろん誰もいないが、この散歩を毎朝の日課とした。散歩の後は家に戻って家族の帰りを待つ。

蝶々を目で追っていたケンはハッとして耳を欹てる。間違いなく車の音が近づいてくるようだ。またケンを捕えようとする女だと思い、ケンは庭の奥へ隠れる。すぐにまた女は諦めるだろう。その後はごはんを置いていくはずだ。これで少し助かる。

ケンが警戒していると思った通りいつもの車が家の前に停車した。ドアが開いた瞬間、ケンはふと覚えのある匂いを感じた。降りてきたひとりを見てケンは走った。

渡辺家の前で車を降りた結衣は、いつも怯え警戒していた犬が尻尾を大きく振って屈んだ麻代に飛び込んでいくのを見て、とても感動した。結衣の隣に車から降りてきた勇斗が並ぶ。勇斗を見ると静かに泣いていた。

佳作

きらきら星

宮城刑務所　桜　きなこ

クミちゃんの手は3本指です。右の手は人さし指と中指がありません。左手は中指とくすり指がありません。それに足の指もたりません。イデンというこわい病気で、生まれた時から指がなかったのだそうです。

病気なんだと先生が言ったので。クラスのみんなはクミちゃんに近づきませんでした。だって、クミちゃんの病気がうつって指がなくなったりしたらたいへんだと思ったからです 。先生はクミちゃんと仲よくしなさいと言います。でも、あたしの指がなくなったりしたら、先生はどうセキニンをとるのでしょうか。インフルエンザがはやった時も、お母さんが言っていました。かぜをひいた子といっしょにして、かぜがうつったら、先生はどうセキニンをおとりになるんですか。

でもいっしょに遊んであげなさいと言われたので、クミちゃんをゴムとびにさそいました。なのに、クミちゃんは首をふって、みんなにまざりません。だれかが「指がないからゴムひもが持てないんだ」と言ったら、クミちゃんは下を向いてしまいました。

クミちゃんは指がないので、鉄ぼうもできません。体育の時間はいつもちょこっとだけやって、あとは見学しています。あたしは逆上がりができなくて、なんどもれんしゅうして、手にマメができても、先生はゆるしてくれないのに、クミちゃんは指がないせいでズルをしているんだと思います。

校長先生も、クミちゃんを見るとニコニコして声をかけます。クミちゃん元気かな、みんなと仲よくしてるかな。ほかのクラスの先生も、クミちゃんの頭をなでながら同じことを言います。 クミちゃんはちょっとかわいい子なので、先生はひいきにしているのです。

それにクミちゃんはいつもきれいな服をきています。マンガの中の女の子みたいなフリルいっぱいのスカートです。みつあみのかみの毛も、あたしみたいなゴムバンドじゃなくて、しんじゅ色したピカピカのかみかざりでとめています。リボンもたくさんもっていて まい日ちがう色のをしてきます。クミちゃんは「お金もちのおじょうさま」なので、なんでも買ってもらえるのだと、ミナコちゃんが言っていました。

お金もちなので、クミちゃんは六十色の色えんぴつをもっています。みんながもっているのは十二色なので、金や銀色のえんぴつがありません。あたしも六十色の色えんぴつがほしいと言ったら、お母さん、十二色でまにあうのに六十色だなんてゼイタクだとしかられました。クミちゃんはゼイタクな悪い子なんだと思いました。

でも、お絵かきコンクールでクミちゃんが金賞をとったのは、そのゼイタクな六十色の色えんぴつのおかげだと思います。体育かんにかざられたクミちゃんの絵は、空をとぶ天使の絵で、金や銀や、十二色の色えんぴつにはない色でぬられていたからです。

指が三本しかないのに絵がうまいなんておかしいと思いましたが、六十色の色えんぴつのおかげできれいにできたんだと思います。

絵を見ていたら、トシヤくんが「この天使には指が五本あるぞ」と言いました。よく見ると、絵の中の天使は五本の指をいっぱいにひらいて空をとんでいます。

三本指のクミコが 五本指の天使をかいたと笑ったら、ヒロシくんが「この絵はクミコがかいたんじゃないぞ」と言いました。ケンちゃんは「絵のうまいだれかにかいてもらったにちがいない」と言いました。そういえば、あたしもクミちゃんがこんな絵をかいているところを見たことがありませんでした。

教室にもどってから、みんなで「さいばん」をしました。クミちゃんはだまって下をむいてしまいました。ほんとうにクミちゃんがかいたのなら、ちがうと言うはずなのに、泣きだしてしまったので、みんなはウソがばれたから泣いたんだと指さしました。

ウソつきの金賞をもらったのに、先生はクミちゃんをひいきしているので、学芸会のおゆうぎにクミちゃんもえらびました。あたしとクミちゃんとケイちゃんとユキちゃんとメグミちゃんで、天使のかっこうをして「きらきら星」を踊ることになりました

たくさんれんしゅうをしました。みんなでいしょうをあわせるので、日ようにメグミちゃんの家にあつまることになりました。

クミちゃんのお母さんもきました。お金もちの奥さまは三角のメガネをかけて、ダイヤの指わをしているはずなのに、クミちゃんのお母さんはうちのお母さんよりもヤボったいかっこうで、ケイちゃんのお母さんに、メグミちゃんの家のお手つだいさんとまちがわれていました。

かりぬいをしておどったら「キラキラほしが」と手のひらをふるところで、ユキちゃんが「クミちゃんはキラキラしていない」と言いました。指がたりないので、手をふってもキラキラに見えないのです。あたしが笑ったらお母さんにたたかれました。でも、お母さんもよこをむいて笑っていました。

メグミちゃんのお母さんが「手ぶくろをしましょう」と言ったので、白い手ぶくろをすることになりました。けれど、指の入っていない手ぶくろの指はぶらぶらとして、もっとおかしかったです。たたかれるのはいやだったので、あとでこっそりみんなで笑いました。

学芸会にはお父さんもビデオカメラをもって見にきました。とてもきんちょうしてしまったので、ちょっとまちがってしまいました。

おゆうぎがおわってから、きねん写真をとり、クラスのみんなで大きな紙によせがきをしました。おとなになったらなりたいものという題だったので、あたしは「ケーキ屋さん」とかきました。トシヤくんが、「内かくそう理大人」とかいたら、先生が「だいじんちがいだなぁ」と言いました。あたしにはよくわからなかったけど、先生がおかしそうに笑うのでみんなで笑いました。

家にかえると、お父さんとお母さんが「よくがんばったね」と言ってデコレーションケーキをだしてくれました。おたんじょう日でもないのに、ロウソクのついたケーキだったので、とってもうれしくなりました。

ケーキを食べながらビデオを見ました。タカシくんが王様のせりふをわすれていたのがおもしろかったでした。あたしたちのおゆうぎも、まちがったところははずかしかったけれど、とってもきれいでした。

ビデオの中で一番きれいでキラキラしていたのはクミちゃんでした。白い手ぶくろをした手をひらひらふると、指のないところがいっしょにゆれて、ほんとのお星さまのようにキラキラに見えるのです。それにくらべるとあたしたちのキラキラは、手の大きなカエルがバイバイをしているみたいでした。クミちゃんにも見せてあげようと思ったので、お父さんにデジプリをたのんだら「お前はやさしい子だね」とほめられました。

スキップしながら学校にいったら、クミちゃんの机がなくなっていました。先生は「クミコさんはおウチのつごうで学校をかわることになりました」と言いました。ミナコちゃんが「しゃっ金とりにおいかけられて夜にげしたのよ、お母さんが言ってたもん」と言うと先生は「クミコさんのおウチは、ちゃんとお昼の間にひっこしたんですから、おかしなうわさを立ててはいけませんよ」とミナコちゃんをちゅういしました。

ホームルームがおわってからもクミちゃんのはなしをしていましたが、給食の時間にはカレーうどんのはなしになっていました。

学芸会のあとも、体育かんにかざりつけがのこっていたので、体育かんはおとぎの国みたいでした。ずっとこのままだったらいいのになと思っていたのですが、月よう日になったらぜんぶかたずけられてしまっていました

かわりにきねん写真とよせがきを教室のうしろにかざりました。学芸会のふんそうをしたままの写真だったので、今のかおとくらべっこをしてあそびました。

写真のすみっこにはクミちゃんもうつっていたのに、よせがきにはクミちゃんの名まえがありませんでした。先生に言おうと思っていましたが、メグミちゃんと九九のれん習をしているうちにわすれてしまいました。

秋の書どうコンクールがおわると写真とよせがきをかたづけることになりました。先生がかべからはがして、あたしとユキちゃんでまるめました。そしたら、ユキちゃんが指をさして「こんなところになんかかいてある」と言いました。よせがきの大きな紙のうらのはじっこの、とても小さな字でした。

『わたしのなりたいもの

五ほんの指のあるふつうの人　クミコ』

天使のような、きれいな字でした。あたしは
きらきら星をちょこっとうたいました。

佳作

聖者の森

山形刑務所　九州男

森に夕日が沈む頃、山賊討伐を終えた傭兵が村へと戻って来た。そこへ、集まっていた村人から山賊共の討伐は？と声が飛んだ。

「ほぼ片付けたが、一人…賊の頭を逃がしてしまった。だが奴は相当な重症だ。明日、もう一度森に入って始末しよう。」

傭兵がそう村人に答えると、

「山賊共が。今まで散々好き勝手に暴れて来た罰だ。元奴隷のくせに。ざまぁみろ。」

と、村人達が喜び合う。その輪の中で、傭兵の胸に、元奴隷という一言が暗く残った。

傭兵の肩が、鈍く疼いた。

この国には、数年前まで奴隷と言う存在が居た。奴隷達は人として扱われず、死ぬまでこき使われていた。王が替わり、奴隷制度は廃止されたが、数年経った今でも元奴隷と言うだけで差別され、忌み嫌われた。

そうして世を追われた者達の成れの果てが、今日傭兵が討った山賊達だった。

気が付くと、男は小さな小屋の中に寝かされていた。体を起こそうとすると、全身に激痛が走った。その痛みで、自分が傭兵から逃げていた事を思い出した。

男が、ここは一体？と思っていると、小屋の扉が開き、十才位の少女が入ってきた。

「あ！おっちゃん、気が付いた！。」

少女が花の咲いた様な満面の笑顔で、男の元へと駆け寄る。

「おっちゃん、村が雇った傭兵さんから逃げ延びたって言う、山賊のお頭さんでしょ？。」

少女が笑って男に言った。男が驚いていると、ニヒっと笑って少女が話しを続けた。

少女によると、たまに買い物に行く村で、山賊討伐や、重症の体で逃げた山賊の頭の事を聞き、その帰り道の森の中で全身傷だらけで倒れている男を見付けた。

何とか小屋まで運び、手当てはしたが、死んでしまうかも…と不安だったらしい。

なぜ山賊の俺を助ける？怖くないのか？お前一人か？親は？と問う男に、少女は少しだけ考える仕草をして答えた。

「目の前で困っている人が居たら、それが例え誰であっても必ず助けてあげなさい。それが人として当たり前の事だから。ってお母さんが教えてくれたの。そのお母さんは…半年前に死んじゃった。だから今は私一人。それにそんな傷だらけで動けない人の事、怖いって思う訳無いでしょ。」

明るく笑う少女を見て、男の口から一つ、大きな溜め息がこぼれた。

傭兵はここ数日、森の中でじっと息を潜めていた。取り逃がした頭を追い、討伐の次の日に一人で森に入った。あの体では、そう遠くへ逃げれまいと探していると、森の奥に小さな小屋を見付けた。窓から中を覗くと、手当てをされ寝かされている頭を見つけた。

この小屋は？他に仲間が？と傭兵が考えていると、森の中から一人の少女が現れた。

とっさに身を隠した傭兵には気付かず、少女は小屋に入ると、男の看病を始めた。

傭兵の中に、増々疑問が増えて行った。その日はそのまま村に戻り、村人に森の小屋の少女のことを尋ねた。すると村人は、数年前に母子二人でふらっと現れて、森の小屋に住み着いたが、母親は半年前に死んだ。それでも一人で明るく健気に頑張る良い子だよ。と教えてくれた。その日から傭兵は、二人の事を少しだけ見張ってみようと考えた。

一週間もすると、頭もどうにか動けるようになったらしく、少女と二人で食料集めをするようになった。

二人の姿は、どこかほのぼのとしていた。冷たい態度の頭を、底抜けに明るい少女が笑ってからかう。初めの内こそうっとうしそうにしていた頭だったが、次第に少女に心を開き、明るくなって行った。そんな様子を、傭兵はどこか少し複雑な想いで見ていた。

元奴隷の山賊に、身寄りの無い少女。孤独な二人が、互いの孤独を埋め合う様に生きている。それを壊す事が、本当に正しい事なのか？壊す権利が、本当に俺なんかにあるのか？と傭兵は二人の

幸せそうな姿を見ながら自問自答を繰り返し続けていた。

しかしそんなある日、ついに最も恐れていたことが起こってしまった。

たまたま森に入った村人に、少女と頭が一緒に居る所を見られてしまい、その後村に買い物に行った少女は、村人達に囲まれてそのまま捕まってしまった。

森に夕闇が迫る頃、男は小屋で少女の帰りを待っていた。いつもなら、とっくに帰宅しているはずの時間を過ぎても少女が戻らない事に、男は強い不安と胸騒ぎを感じた。

まだ痛む体に鞭を入れ、村へ走った。村の入口に近付くと、広場に人だかりが見えた。目をこらすと、その中心に怯える様に地面にうずくまる少女が見えた。

「親が死んで、一人で可哀相だと思ったから面倒見て、今まで良くしてやったのに！恩を仇で返しやがって！。」

村人が少女を罵る声が響き渡る。その中心で、怯えてうつむく少女の腕を一人の村人が強引に引いた。その力で、少女の服の袖が破れた。あらわになった少女の肩を見た村人達が一斉に息を呑み、どよめく。

少女の肩には、元奴隷に刻まれた焼印が、痛々しく残されていた。

「こいつ…元奴隷じゃねぇか！。」

「やっぱり！母子揃って怪しかったんだ！。」

「元奴隷のくせに！人を騙しやがって！。」

怒声が飛び交う中、大きな悲鳴が響いた。皆が何事かと顔を向けると、山賊の頭が剣を手にして立っていた。

「よう。お前等が探してるのは、俺だろ？。」

不敵な笑みを浮かべ、頭が少女の元へ近付く。恐怖を感じた村人が、少女の髪を乱暴に掴んで立ち上がらせ、人質にした。

「そっ…それ以上近付くな！こいつがどうなってもいいのかっ！。」

「はぁ？そんなガキ、知らねーよ！。」

頭が大きく剣を振り上げ、そのまま村人と少女に向かって振り降ろした。

ガキン、と激しい金属音と共に剣が止まった。間一髪、傭兵の剣が頭の剣を受け止めた。

それを見た頭が、小さく笑った。互いの剣を弾き返すと、二人の斬り合いが始まった。

「…きっと来てくれると信じてたぜ。」

激しい戦いの最中、頭が傭兵に囁いた。その声に、傭兵は顔をしかめて頭の顔を見た。

「あんたに頼みがある。あんた…どうかあの子の面倒…見てやってくんねぇか？。」

互いの剣を受けながら、頭が小声で呟く。なぜ？と目をやる傭兵に、頭が続けた。

「あんた…ずっと俺等の事を見張ってたろ？ちゃんと気付いてたさ。すぐに殺せるはずの俺を、あんたは殺さなかった。どうやらあんたは…相当なお人よしらしい…。だから…頼む。あの子の面倒…見てやってくれ。」

傷が開き、包帯に血が滲む。頭の顔が苦痛で歪み、呼吸が激しく乱れた。

「あの子は一人で…しかも元奴隷だ。この先まともになんて生きて行けるはずねぇ。かと言って…元奴隷で山賊の俺なんかじゃ…面倒を見れる訳がねぇ。金なら俺の隠した宝…全部くれてやる…。だからあの子に…人並みの幸せって奴をさ…見せてやってくれよ。」

頭がほほ笑み、傭兵を見た。頭の目に涙が溜まり、揺れて光った。

「立派な傭兵のあんたに…頼んだぜ！。」

頭の言葉に傭兵の動きが止まる。それを見た頭が、自ら傭兵の剣へ飛び込んだ。

頭の体が、糸の切られた操り人形の様に、ゆっくりと崩れて行った。静寂の中で、少女が泣きながら頭の元へ駆け寄った。

「おっちゃん！おっちゃん！やだ！死んじゃやだよ！もう一人にしないでよっ。」

涙で顔をくしゃくしゃにして、少女が何度も頭の身体を揺らす。

「…お前なんて知らねぇよ。…ったく。俺の一世一代の大芝居を台無しにしやがって…。」

頭が優しく笑い、少女の髪をなでた。

「傭兵の事…う…恨むな。遅かれ早かれ…俺はこうなる運命だったんだ。これからは…こいつが一緒に居てくれる…面倒…見てくれる。大丈夫…こいつはお人よしだし…俺なんかより…り…立派な…人間…だ…から…。」

少女をなでていた手が、力無く落ちた。少女の泣き声が、悲痛に響いた。

「人として生きたい。ただそれだけなのに…なぜ

こうも…悲しみが産まれるんだ。」

少女の涙に呼応する様に、夜空も冷たい涙を流し始めた。傭兵は、その涙の中で疼く肩を強く掴んだ。冷たい空の涙の中で、肩の焼印だけが、熱く、悲しく疼いていた

佳作

幸せ

福島刑務支所　M・A

私が初めて幸せを感じた日のことを思い出すたび、春特有の強い風がザァっと吹き渡り、辺りには桜の匂いが漂う。私の視界は桜の花びらで覆われる。

あれは小学校入学を控えた春休み。日曜日の昼下がりのことだった。私達家族は近くの公園へ出掛けることにした。久しぶりに家族揃って出掛けられることが嬉しくて、私ははしゃいでいた。父と母はそれぞれ私の手を取り、三人並んで公園に向かった。二人に挟まれた私は、左を向けば父親が、右を向けば母親が居てくれることに得意満面であった。その途中長い桜並木があり、私は人生六度目の桜の美しさに心を奪われた。満開に咲き誇る桜の花を見ている内に、長い受験勉強からの解放感と、合格を果たすことができた満足感が込み上げてきた私は、二人の手を振りほどき桜並木を走りだした。ハラハラと舞い落ちてくる桜の花びらが私の手や顔に張り付く。午後の明るい日差しが私の行き先を照らしていた。えもいわれぬ心地良さに身を任せながら、私はこの感覚の名前を探していた

「ねえ、ママ？」

と後ろを振り返ったその時、私の世界からは音が消え時が止まった。

父と母が桜並木の下で手を繋いでいたのだ。母は左手を自分のお腹に当てていた。この時母のお腹の中には、私の弟となる小さな命が宿っていた。二人は私が見たことのない穏やかな表情を浮かべていた。私は二人に声をかけることができずに立ち竦んだ。未だかつて感じたことのない感情が私の身体中を駆け巡っていった。

「幸せ」

私の口から卵を産み落としたように、ポロリと言葉が転がり落ちた。誰かに教えてもらったわけでもないのに、私の本能はこの言葉の意味を知っていた。この言葉が持つ温かさを、柔らかさを知っていた。父と母は今、一つの幸せを分かち合っている。私と二人の間を強い春風が吹き抜け、桜吹雪が舞った。父と母の姿がピンク色に霞み再び輪郭を取り戻した時、私の胸の内に広がった感情もまた、幸せであった。私はその瞬間、自分自身が幸せを噛み締めていなくとも、幸せに浸る他者の姿を見ることで幸せな気持ちになれることを知った。幸せは 伝播するものなのだ。この発見を一早く両親に伝えたいと思った。だけども私は、二人を丸く取り囲む幸せな空気を壊すことができなかった。もう少しだけ、桜色に染まった父と母の顔を見ていたかった。両親はそんな私に気付くこともなく、桜の木を見上げている。私の兄弟となる赤ちゃんも、お腹の中で笑っているのだろうか？

私は大きな幸せに圧倒されていた。大事な人が幸せに浸るその姿を眺めながら、幸せを噛み締める。と同時に、あまりに大きな幸せを感じると鼻の奥がツンとして、涙が込み上げてくることも知った。悲しいから流れる涙が嬉しくても溢れてくることが可笑しくて、私は思わず

「ふふふ」

と声を漏らした。私がお姉ちゃんになったら、今日のことを一番に教えてあげよう。そして

「あなたも覚えている？」

と聞いてみよう。そう思った。

私はあの時確かに、大人への階段を一つ上がったのだと思う。一陣の風が吹き桜の枝が一斉に揺れ出したのを合図に、私は二人の元に駆け寄った。この思いを伝えようと思ったけれども、口にした瞬間から幸せが零れ落ちていってしまいそうで、私は走りながら唇をキュと引き締め

「今日のことは私と赤ちゃん、二人だけの秘密にしよう」

と心の中で呟いた。父と母が振り向く。二人の笑顔は涙で少し滲んでいた。そんな私達を桜の花が静かに見下ろしていた。祝福のつもりだろうか。ピンクの花びらを舞い落としながら…

今でもあの情景が蘇ると、私の心は幸せに浸り温かく膨らむ。両親の姿が私を幸せにしてくれたように、私も誰かを幸せにすることができるのだろうか？幸せはなにも、大きな出来事が運んでくるものでもなければ、探し出すものでもない。些細な日常の中に、その姿をそっと隠している。その存在に気が付くことができるかどうかなのだ。私は幸せを見落とさない心の機敏と、開いた眼を持ち続けたいと思う。そして配達員の少年が各家に新聞を配るように、私も人の心に幸せを配りた

い。笑顔になった人の顔は、さらに別の人の笑顔を誘う。幸せの伝播は私達の心に灯を点し、明日を優しく照らしてくれるだろう 。私達は怖がることなく足を踏み出し、真っすぐ前を向いて歩いていける。これから出逢う大切な人を幸せにするために。

【選評】―作文―

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問　原田勇男

応募作品は二十篇。金賞は龍齋さんの「くもと青空」。刑期を終えて出所した辰史に仕事はない。妻とは離婚し五歳だった娘は二十歳になるが会うことはできない。そのとき、コンビニから出てきた五歳ぐらいの女の子が道路に飛び出した。急速に近づくオートバイ。辰史はとっさに飛び出し女の子を助けた。母親と女の子のお礼の言葉に、辰史の心は晴れた。どんな仕事でもやろう。人のために尽くそうと決意する結びが感動的だ。

銀賞は鳴寂さんの『生きる～一心白道～』。サブタイトルの言葉は仏語で「ただこの道一筋とわき目もふらず目的に向かって行くこと」。明は隣に越してきた年長の金融関係の紳士哲と知り合う。だが彼は極彩色の刺青を入れた高利金融の社員。明は「哲兄ィ」と慕うが、彼は明に遺言を残して死んでしまった。白血病と癌を併発しながらボランティアに励み、3年間闘病の末に亡くなった。人生の味がする好短編を読むような印象を受けた。

銅賞は力風さんの「再会」。放射能に汚染された福島県の避難区域に非合法で入り、置き去りにされた動物を保護するボランティアの活動を描いた。渡辺家の雑種犬ケンが飼い主の主婦麻代の匂いを嗅ぎつけて、胸に飛び込んでいくラストシーンが心に残る。

佳作は九州男さんの『聖者の森』、M・Aさんの『幸せ』、桜きなこさんの『きらきら星』。九州男さんの作品は土俗的だがヒューマンなストーリー性を評価。M・Aさんと桜きなこさんの作品は子供の視線からファミリーや障害者への思いやりを表現している。

《詩　苑》

金賞

笑顔を見せて

福島刑務支所　M・M

また泣いていたの？
あなたが今そこで苦しんでいるのは
誰かのせい？
周りの理解がなかったから？
親の育て方が悪かった？
その性格は本当に生まれつき？

違うよね
本当はわかってるんでしょ
誰のせいでもないってこと
誰かや何かに追い立てられて
ここまで来たんじゃないってこと
その道を選んだのは自分自身だよね
引き返せる道はいくつもあったのに
見ないふりをしたことを認めてしまうのが
怖かったんだよね

誰かのせいにして救われたかっただけ
そうやって自分を守ってきたんだね
わかるよ　苦しかったね
居場所を失う怖さに負けてしまったんだね
何が自分らしさなのかもわからないのに
自分が自分でなくなるのが怖かったんだね
独りで抱えてつらかったね

でももう大丈夫。周りを見てごらんよ
あなたの努力を信じて待ってる人がいるよ
過去は変えられないけど、これからは
自分次第でいくらでも変えていけるんだ
自分は自分の人生の主人公なんだよ
世界でたった一人の自分を創る責任者なんだ
だからもう逃げちゃだめ
決して自分を嫌いにならないで
自分が自分を信じてあげなきゃ
現実を受け入れたあなたはもっと強くなれる
そんな顔してたら幸せが逃げちゃうよ
泣くのはおしまいにして笑顔を見せて
と私は鏡の中の自分にほほえんだ

銀賞

しあわせのめがね

山形刑務所　Y・T

今日も働くことのできない人もあろうに、私は思う存分働かせてもらった。有難いことだ。

今日も食べることのできない人もあったろうに、私は充分食べさせてもらった。勿体ないことだ。

今日も不愉快に暮らした人もあろうに、私は生き甲斐を感じて暮らさせてもらった。嬉しいことだ。

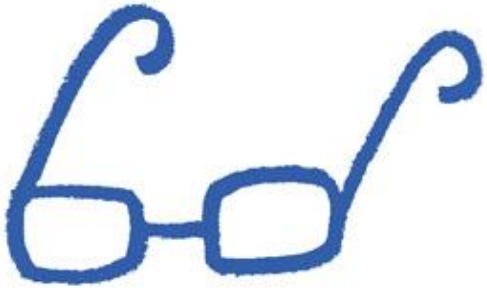
今宵も悩み続けて悲しみ悶え、涙で枕を濡らす人もあろうに、私は安らかに眠らせてもらう。幸福なことだ。

衣服が粗末というのか？食べ物が不味いというのか？部屋が狭いというのか？

感謝の心を開いてみよう。何を着ても勿体ない。何を食べても結構だ。どこに住んでも有難い。その日その日が愉快である。

満足と感謝のめがねを用いてこの世を見よう。すべてが幸福に見えるぞ。

いかなることも、いつまでもこのままということはないのだ。未来に希望を持って生きよう。この世はとても生き甲斐ある楽天地ではないか。



銅賞

今を大切に

山形刑務所　玉兎

あなたは今日を大切にしていますか？
今を大切にしていますか？

今日だからできることもある。
今じゃないとできないことだってある。

忙しい、面倒くさい、明日やればいい
何かと理由をつけて、後回しにしていませんか？

あの時やっておけばよかったと
後で悔やむことのないように
今できることを精一杯やろう。

過ぎた時間は取り戻すことはできないから
無為に過ごすことのないように
今できることを精一杯やろう。

未来は未来にのみあるものではなく
過去にこそ未来はあるのである。
過去に為したこと、今為したことが、未来をつくるのである。

あなたはどんな未来を望んでいますか？
あなたの望む未来を手に入れたいなら
今日を大切にしてほしい。
今を大切にしてほしい。

佳作

心象風景

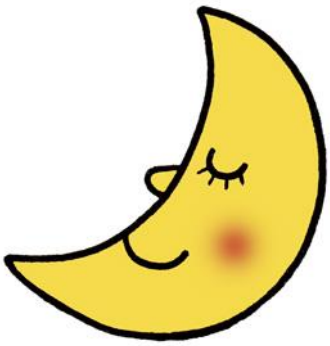
宮城刑務所　岳南次郎

夢を見て居ます。
今がとても幸福です。
忘れかけた四方の厳しさに解放され
閑雲野鶴の世界に迷い込んで居ます
苦しげに見える般若の顔が不安さに
まるで風化した雨音の不安さに
心の歪みが丸く長く微笑む
怯えに心の歪みが会釈する
セピア色の思い出が静かに忍び寄る

夢を見て居ます
ふとんの暗闇の中では
ここは楽園一人の世界
随分と自分勝手に過ごせます
過ぎし栄光の絆にも
負けず立ち向かって
けして背伸びしません
苦しげに聞こえるのは我が声か

それは今の世界を守ろうとする橋頭堡

夢を見て居ます
青葉が目に染みてます
タンポポの逞しさに興奮を覚え
陽の指す眩しさに笑顔してる
そんな自然の力強さに反省させられた
攪乱された精神
軽率さが私にノックする
まるで悪と正義の戦いのようだ
そして静かに元の世界へと帰る



佳作

心

山形刑務所　豆太郎

誰も見ていなくとも、自分の心が観ている。
他人が気づかなくとも、自分の心が気づく。

自分が今、心で何を思っているか。
自分の行いにどんな心があったのか。

如何なる感情も、如何なる意志も、それがどこから
やってきて、自分がどこに向かおうとしているのか、
自分の心がすべて観ている。

自分自身を最も知るのが自分自身であり、自分自身
を最も知らないのが自分自身である。
自分自身に嘘をついても、自分自身がそれを見抜く。
自分自身をごまかせても、自分の心はごまかせない。

自分の心が自分自身を創る
環境は自分の心を映し出す万華鏡である。
自分の人生に多くの善悪があったはず。

それらの善悪すべて創ったのは、他の誰かではなく、
自分自身の心。

自分の心が自分の人生を創る。
自分の心が誰かの心を惹きつける。
自分の心が成功への意志を作り出す。

自分の心に相応しい苦楽が訪れる。
儚い人生を心豊かに過ごせるかは、自分の心ひとつ。

行く道は幾つもある。
自分の心に問いかければ、きっと行くべき道が見え
てくる。
どの道を歩んでいこうと、自分の人生を楽しむほか
ない。
最期には笑えるように。

佳作

証

福島刑務支所　M・A

愛されたいと小声でそっと囁く時
ゴゥという音と共に孤独の風が吹き抜ける。
辺りに冷たい夜の匂いが漂い出す。
だけどある時ふっと気が付いた。
愛されたいと強く願うのは
誰かに強く愛された記憶があるからなのだ。
その瞬間
孤独の風は鳴りを潜め
代わりに懐かしい母の匂いが私を包んだ。
愛されたいと願うことは
母に愛された何よりの証なのだ。
　辛い辛いと小声で現実を嘆く時
ザァという音と共に暗闇が辺りを覆う。
心は安定を欠き
不安の波に飲み込まれる。
だけどある時ふっと気が付いた。
辛い辛いと現実を嘆くのは
逃げ腰になっているからではない。
それ所か決して頽れることのないよう
大地に足を強く踏み締めている。
幸せになることを諦めていないという
何よりの証なのだ。
その瞬間
暗闇は晴れ
穏やかな日差しが射し込んだ。
心は大海の波音を聴きながら
日溜まりにまどろむ。
　私の身体の中にはいくつもの証がある。
その証が今の私を創っている。
そして私はこれからも
証を刻んでいく。
いつか私が後ろを振り返った時
その道のりには
大きかったり小さかったり
歪んでいたり
たまには足踏みをしていたり
だけど真っすぐに歩いてきている
私の証がしっかりと残されているはずだ。

【選評】―詩―

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問　原田　勇男

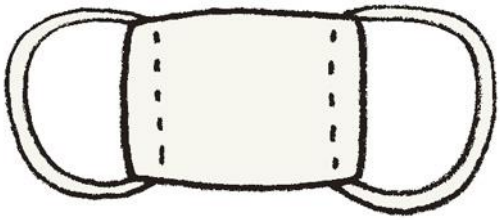
応募作品は一七篇。コロナ禍で世界中が暗闇に閉ざされている時代に、どんな詩がふさわしいかを考えた。そんな観点から、三賞には明るく前向きな作品を選んだ。

どの作品も優劣をつけがたいのだが、金賞はM・Mさんの『笑顔を見せて』。人生は必ずしも思い通りにはならない。うまくいかない自分に苦しんで泣いている人に励ましのエールを送る。「過去は変えられないけど、これからは／自分次第でいくらでも変えていけるんだ」。最終行で「と私は鏡の中の自分にほほえんだ」という結びの言葉が効いている。

銀賞はY・Tさんの『しあわせのめがね』。自分が今生きている場所を肯定的にとらえている。「満足と感謝のめがねを用いてこの世を見よう」と語り、「すべてが幸福に見えるぞ」と前向きに対処する姿勢を貫く。そして「未来に希望を持って生きよう」と力強く呼びかけている。

銅賞は玉兎さんの『今を大切に』。「今日を大切に　今を大切にして いますか？」とシンプルに問いかける。人はこの世に生まれてだれでも死ぬが、生きている間は現在の時を大切に生きるしかない。「過去にこそ未来はある」「過去に為したこと、今為したことが未来をつくる」という言葉が印象に残った。

佳作は心をテーマにした岳南次郎さんの『心象風景』、豆太郎さんの『心』、M・Aさんの『証』を推した。いずれも心が人生をつくると真摯な気持ちで自分に向き合っている。



《歌　壇》

金賞

人生の貯金のような本棚に今読み終えし本を収める

青森刑務所　鳴寂

銀賞

小止みなく風花舞ふを眺めいぬ写経の筆の乾き忘れて

青森刑務所　夢幻斎

吾(あ)が泣けど諍(いさか)ふ父母を止められず幼きに知りし無力さとふもの

宮城刑務所　桜　きなこ

「できない」と言わぬがモットー「喜んで！！」不器用なりのプライドひとつ

福島刑務支所　M・M

銅賞

伸びし影を歩道に並べ君と行く冬のにおいのする帰り道

山形刑務所　裕鴨

ペルセウス流星群の流るるを探せど見えぬ獄窓からは

山形刑務所　曼珠沙華

出役の途中でみつけたふきのとういつもの作業もかるく楽しき

山形刑務所　玉兎

ふわふわときみの癖字が舞っていた三枚ほどの二月の手紙

山形刑務所　初空月

かまきりは二刀流にて構えたり草引くわれの前の草穂に

福島刑務所　T・M

佳作

われの居る狭き四畳の独房を学びの場として鍛えてゆこう

青森刑務所　T・T

青いそらをぼんやりみているとそっとこころは消えてゆくよう

宮城刑務所　M・K

回収車去りたる後にごみ袋ひとつ残れりシール貼られて

宮城刑務所　萩の月

息白く震える肩にかじかむ手喉もと過ぎる茶のあたたかさ

山形刑務所　龍齋

コンサートよりもあなたと並んでる時間の方が僕は大切

山形刑務所　十三郎

幾重にも押し寄す波に揉まれゆく石丸いのは人も同じか

山形刑務所　天聖

小さな靴さらに小さな靴並び寄り添うようにそっと脱ぎゆく

山形刑務所　雨音

暑き真夜のどの渇きに目の覚めて生ぬるき水を喉（のみど）に流す

山形刑務所　弘雀（美峯）

獄中の草刈り後の草の匂いなつかしく想うふるさとの街

福島刑務支所　U・N

会いたいと夢の中では言えるのにペンを持つたび筆先止まる

福島刑務支所　M・A

【選評】―短歌―

伊藤　久子
「橄　欖」運営委員
「橄　欖」宮城支部代表
日本歌人クラブ会員
宮城県芸術協会　文芸部運営委員
宮城県歌人協会　「橄　欖」代表

短歌は三十一音の短詩です。令和二年度の作品には、古里を恋い、現役の職場や逢いたい人への手紙、罪の重さ、母の面影、更生、裏切り、感謝、親孝行等々百九十八首、すべて一生懸命に詠んでいました。金銀銅みな僅差です。

【金】人生の貯金のような本棚に
今読み終えし本を収める　鳴寂

「評」人生を「貯金のような本棚」に喩えて発想が素晴らしいし臨場感も出ています。

【銀】小止みなく風花舞ふを眺めいぬ写経の筆の乾き忘れて　夢幻斎

「評」筆の墨が乾いたのに気づかずに風花を眺めていた、と言う具体が画像に見えます。

【銀】吾(あ)が泣けど諍(いさか)う父母を止められず幼きに知りし無力さとふもの　桜きなこ

「評」幼い時に、父母の諍いを泣きながら止めようとした、いじらしや、さとりが賢い。

【銀】「できない」と言わぬがモットー「喜んで！！」不器用なりのプライドひとつ　M・M

「評」一気呵成に詠んで、気風のいい、気持の通った歌です。元気が良くて励まされます。

【銅】伸びし影を歩道に並べ君と行く冬のにおいのする帰り道　裕鴨

「評」この「冬のにおいのする」に発見と詩があり、ゆとりや甘美な雰囲気が漂っています。

【銅】ペルセウス流星群の流るるを探せど見えぬ獄窓からは　曼珠沙華

「評」狭い窓からペルセウス流星群を探したという動作と、諦めが切なく感じ取れます。

【銅】出役の途中でみつけたふきのとういつもの作業もかるく楽しき　玉兎

「評」作業中、春の先がけの蕗の

薹を見つけて、心が軽くなった、読者も明るくさせられます。

【銅】ふわふわときみの癖字が舞っていた三枚ほどの二月の手紙　　初空月

「評」恋人からの見慣れた文字、「二月の手紙」のポエムとなって舞っているような手紙。

【銅】かまきりは二刀流にて構えたり草引くわれの前の草穂に　　T・M

「評」そう言われれば、「二刀流」ですね。下句の表現に具体性があり納得させられました。

《俳　壇》

金賞

郭公や今年限りと鍬を打つ
宮城刑務所　K・Y

銀賞

ジメジメの日に生き生きと蝸牛
宮城刑務所　O・M

梅雨晴や雀飛びつくパンの耳
宮城刑務所　萩の月

なつかしき父のバリカン夏きたる
山形刑務所　蟹牡丹

銅賞

黒南風（くろはえ）や雑踏の音速めたり
青森刑務所　鳴寂

秋雨が流してくれる胸の澱
宮城刑務所　力風

ずいき炊く祖母の背中を懐かしむ
山形刑務所　曼珠沙華

春雷や贄を捧ぐる縄文人
山形刑務所　弘雀（美峯）

黒南風（くろはえ）や窓際に吊す洗い靴
福島刑務所　J・A

佳作

ボンネット猫が陣取り日向ぼこ
宮城刑務所　猛虎

肩車吾子の瞳に遠花火
宮城刑務所　美重

寝ころべば大地が動くいわし雲
宮城刑務所　M・K

コロナ禍で球児届かぬ甲子園
秋田刑務所　N・Y

みちのくの森が届ける牡蠣便り
山形刑務所　不二天風

今生の別れか友よなごり雪
山形刑務所　龍齋

店先の氷ののぼり揺れ光る
山形刑務所　九州男

針刺しの古刹の氷雨過疎迫る
山形刑務所　天聖

交番に色とりどりの梅雨の傘
山形刑務所　雨音

秋灯や廃る駅舎の透き間あな
山形刑務所　白岳

天を突く入道雲に父思う
山形刑務所　平蔵

蒲公英よわたしを乗せて飛んでゆけ
福島刑務支所　M・M

【選評】―俳句―

全体的な感想としましては、俳句として評価される作品ばかりでしたが、中には季語の重なりや、季語の説明になっている句が見られました。また単なる報告だけの句もありました。またどこかで見かけたことのありそうな句もありましたが、あまり気にせず名句を沢山真似たり数多く作ることで、その内に自分独自の作品をものにすることが出来るようになれると思います。

それでは入選句の選評に移りましょう。

郭公や今年限りと鍬を打つ

宮城刑務所　K・Y

現代の農家はどこでも後継者不足です。というより農業では食べていけない状況に置かれています。郭公の来るいい季節に田植えをしたり畑を耕したりした光景は昔話となりつつあります。掲句にはそのような状況を抱えながら、ついに今年限りで農業を止めることになった寂しさが述べられ、農家出身の私の胸を打ちました。

ジメジメの日に生き生きと蝸牛

宮城刑務所　O・M

梅雨の季節はジメジメとし鬱陶しい日が続きます。蛞蝓などはまさにジメジメとしたところを好む生き物ですが、蝸牛は戸外を生き生きと動きまわっていることに焦点を合わせており、爽やかさすら感じさせる作品です。

現代俳句協会宮城県支部幹事
宮城県俳句協会常任幹事
宮城県芸術協会委員

鈴木　三山

梅雨晴や雀飛びつくパンの耳

宮城刑務所　萩の月

梅雨の時期は雀たちにとっても憂鬱なことでしょう。しかし梅雨晴間には元気に飛び回っています。庭の餌台に置かれたパンの耳に気付くと飛びつくように啄む様子が描かれていて好感が持てます。

なつかしき父のバリカン夏きたる

山形刑務所　蟹牡丹

子供の頃は大概坊主頭でした。夏が来ると父がバリカンを取り出

してぼさぼさの頭を奇麗に刈ってくれたのでしょう。今は亡き父の思い出をバリカンに託されているようです。

《柳　壇》

金賞

登るほど視野が広がる老いの山

宮城刑務所　伏龍

銀賞

赤でいい見送る汽車のシグナルよ

山形刑務所　天聖

夢語る娘の顔は大人びて

福島刑務支所　I・S

忘れたい忘れたくても忘れない

福島刑務支所　E・M

銅賞

山々は無料奉仕の紅葉期

宮城刑務所　T・S

国言葉忘れ遠のく故郷かな

山形刑務所　九州男

愛娘君の笑顔が生きる糧

山形刑務所　福翔群

ありんこが道に迷って塀の中

福島刑務支所　U・N

洗顔が辛くなくなり春を知る

福島刑務支所　H・S

佳作

今日もまた新たに生きて生き治す
青森刑務所　鳴寂

待ち人を思えばこその我慢かな
青森刑務所　新町の旅がらす

脱派閥できぬ政治の古くささ
宮城刑務所　猛虎

扇風機一緒になって首まわし
宮城刑務所　M・K

本当は自分のためのボランティア
秋田刑務所　O・D

徒競走意気込みばかり先走る
山形刑務所　鴉林檎

地震で揺れる鉄扉の悲しい音ひびく
山形刑務所　白岳

帰りたい小さな命待つ家へ
福島刑務支所　T・K

よく笑う人の苦労を知っている
福島刑務支所　O・F

思いやり誰もが出来る贈り物
福島刑務支所　K・N

大丈夫見ている人はいるんだよ
福島刑務支所　M・M

平凡に生きる毎日宝です
福島刑務支所　M・Y

【選評】―川柳―

川柳宮城野社同人
宮城県芸術協会会員
佐藤岩男

初めて川柳へ挑戦した方々もいるようでしたが、たくさんの佳い句に出合う事が出来ました。

現在の自分自身を見つめ直し、これからどう生きて行けば良いかとか、子どもの成長ぶりを眩しく眺めたり、老いていく両親などとの絆を感じさせる句や、故郷の自然や人々の生活を懐かしむ、素直な気持ちを詠んだ句が多かったようです。また、世の中の動きを巧みに捉えた句や現在の生活を客観的に詠んだ句も印象に残りました。

「川柳」というと、世間ではサラ川に多く見られるような（もちろん、佳い句もたくさんあります）駄洒落や言葉遊びに終始する句が全てという風潮がありました。今回は、これらのような頭だけこさえた川柳が少なくなり自分自身が見たり聞いたり感じたりしたことを、自分の言葉で表現している句が多く、嬉しく思います。

私が川柳を始めた頃、我が師が繰り返し言われたことは「上手な句を詠もうと思うな、佳い句を詠め」でした。これは、どう詠むかではなく、何をどの方向から詠むか（着想と視点）が重要であるということだと思います。

《 絵　画 》

金　賞

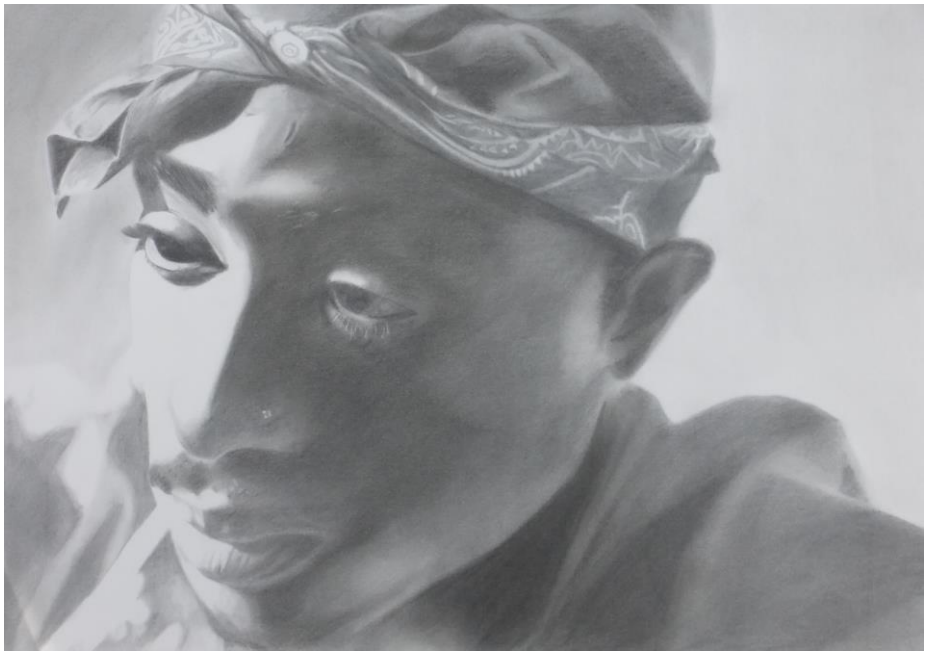
『まなざし』
山形刑務所　翠小灰

【選評】　女性の表情が生き生きしている。色彩の調和も申し分ない。

※表紙掲載作品

銀　賞

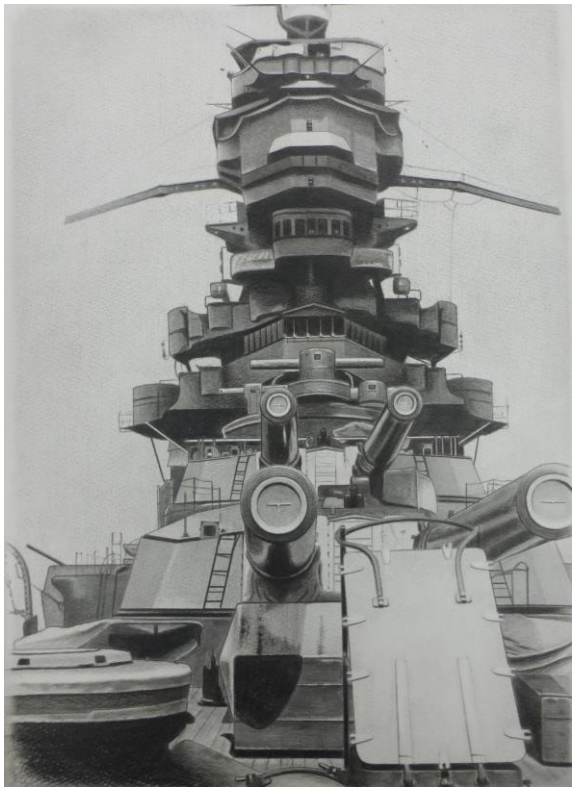
「鮮烈アンモナイト」
福島刑務支所　Ｉ．Ａ
選評　アンモナイトの表現の仕方に工夫が見られる佳作。



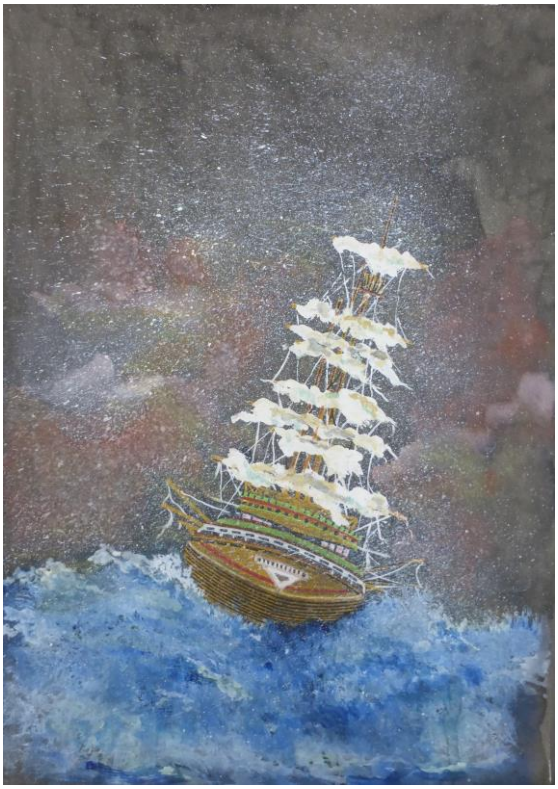
「茫洋」
山形刑務所　M. N
選評　鉛筆デッサンとしては丁寧で人物の質感も申し分ない。

銅　賞

「ＳＡ・ＫＵ・ＲＡ－弘前公園－」
福島刑務支所　Ｅ・Ｍ
選評　全国に知られる弘前の桜を現場以上に美しく表現した。



「猛き艨艟-戦艦伊勢-」
山形刑務所　Ｍ・Ｋ
選評　鉛筆画の質感あふれる戦艦の描写が秀逸！



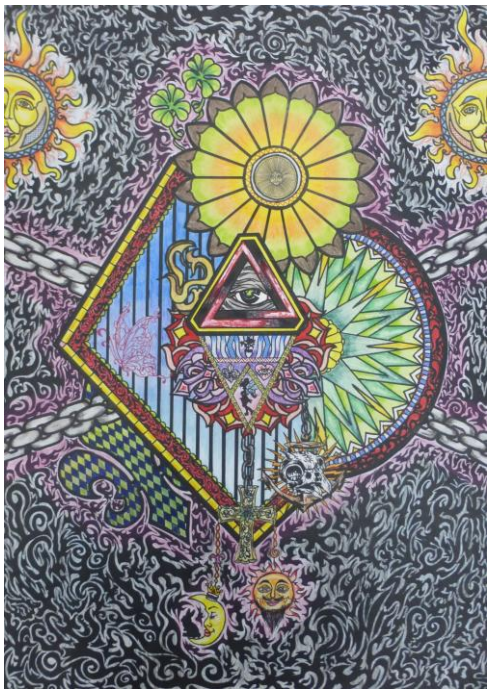
「船」
宮城刑務所　Ｍ・Ｋ
選評　荒れくるう海と戦う船の様子がみごとに表現された。

佳　作

「私のいる場所（抽象画）」
盛岡少年刑務所　Ｔ・Ｙ

「夏」
秋田刑務所　Ｋ・Ｓ

「坂田怪童丸」
青森刑務所　Ｕ・Ｍ



「New World Order～新世界秩序」
山形刑務所　がみ

「オリンピック、２度目の銅メダルで最高の笑顔」
福島刑務所　Ｈ・Ｔ

《 ポスター・カレンダー 》

金　賞

「ほたるのさんぽみち」

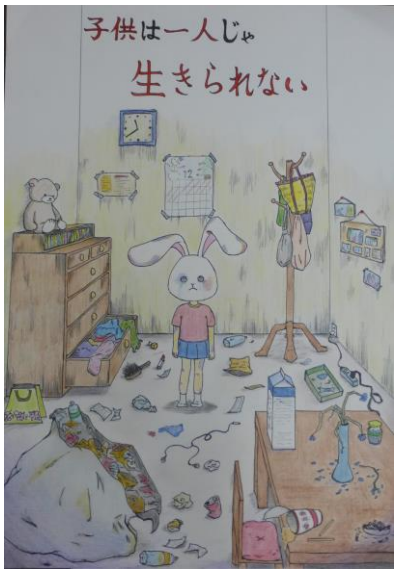
山形刑務所　Ｕ・Ｓ

選評　カレンダーとしての役割を良く果たしてます。文字（数字）レタリングの良さ、スッキリまとめた絵画になってます。

銀　賞

「マスクをつけよう」
山形刑務所　翠小灰
選評　言いたいことが多すぎが残念。レタリングも絵柄もとても良いのです。整理しましょう。

佳　作



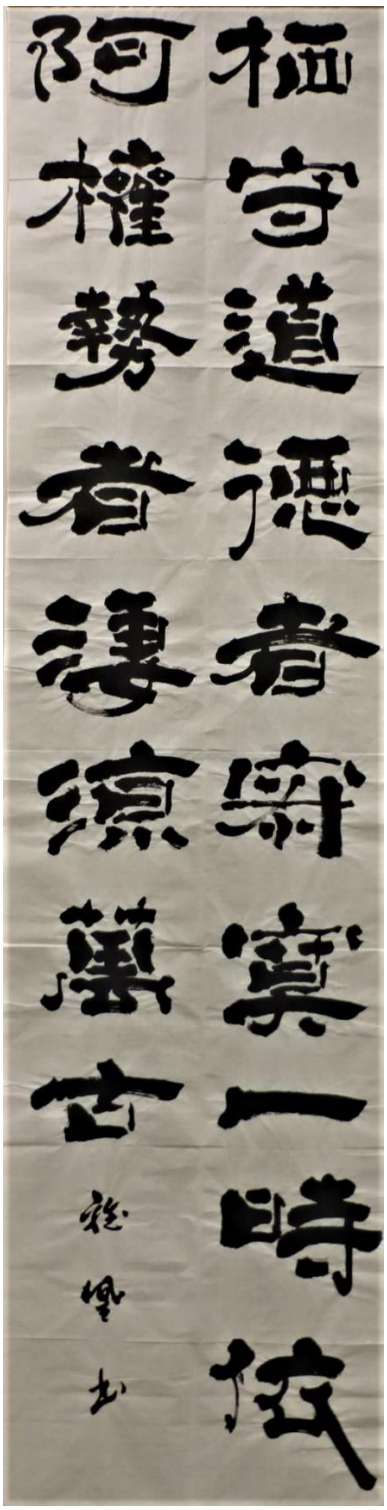
「刑法第２１８条」
福島刑務支所　Ａ・Ｓ
選評　一人ぼっちがよくわかる絵柄です。レタリングの文字はもっと大きい方が良い。

銅　賞

「社会復帰」
福島刑務所　Ａ・Ｆ
選評　画面のスッキリ感を評価しました。レタリングも美しい。

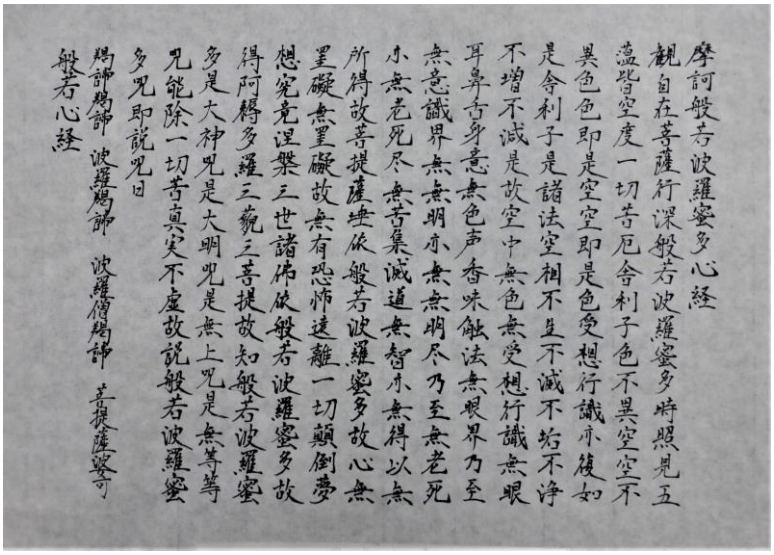
《 毛 筆 》

金　賞



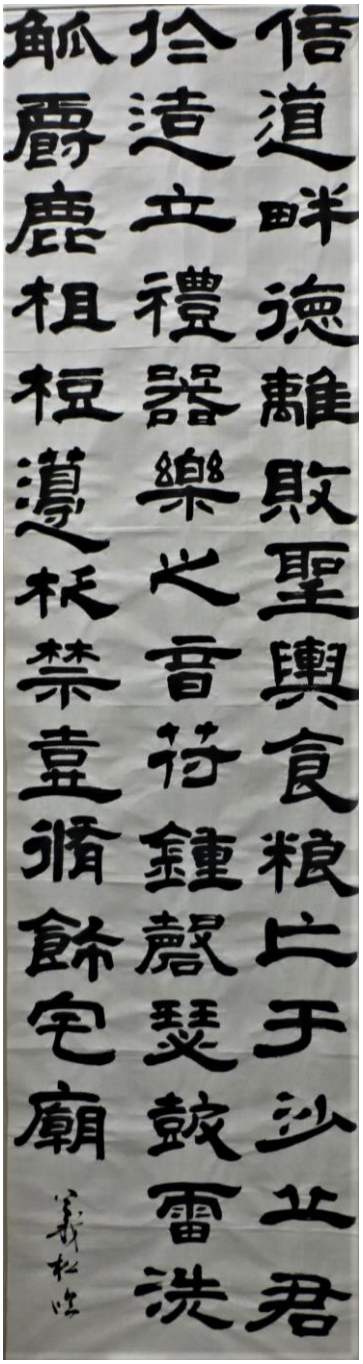
「菜根譚前集一」
　宮城刑務所　雅凰
選評　隷書の基本を修得しており、力強く錬度の高い作品。

銀　賞



摩訶般若波羅蜜多心経
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中無色無受想行識無眼
耳鼻舌身意無色声香味触法無眼界乃至
無意識界無無明亦無無明尽乃至無老死
亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等
呪能除一切苦真実不虚故説般若波羅蜜
多呪即説呪曰
羯諦羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提薩婆訶
般若心経

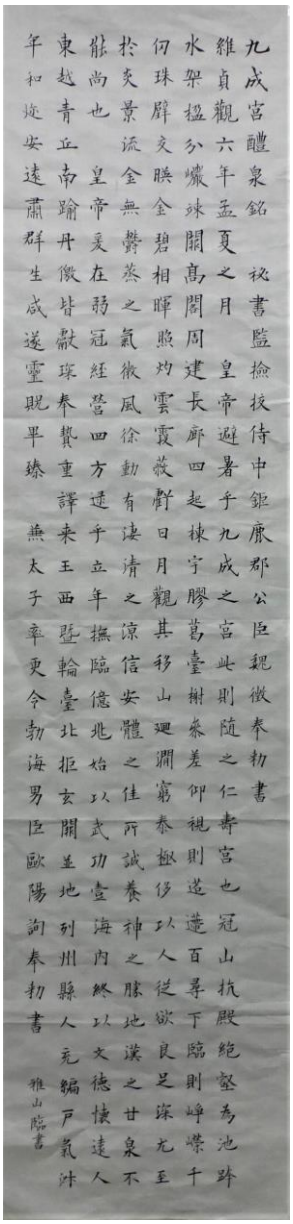
「般若心経」
　青森刑務所　Ｓ・Ｓ
選評　精神を集中し丁寧に浄書している。

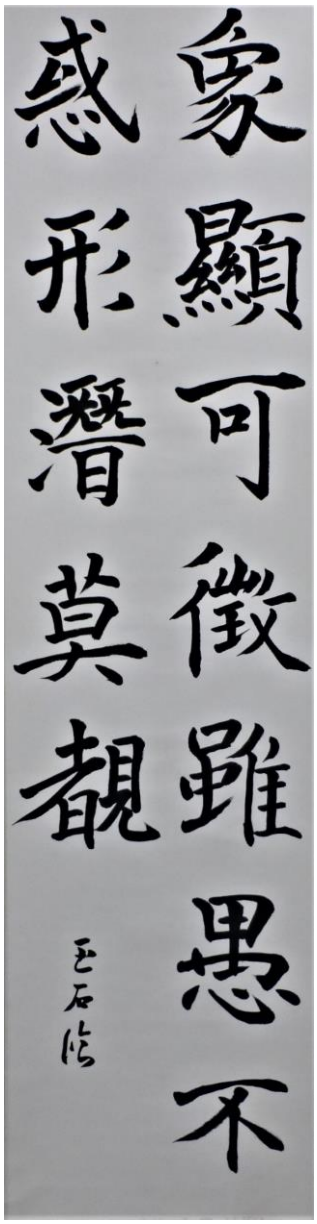


「礼器碑　臨書」
　宮城刑務所　義松
選評　原帖の特徴を良く捉えた努力の作。

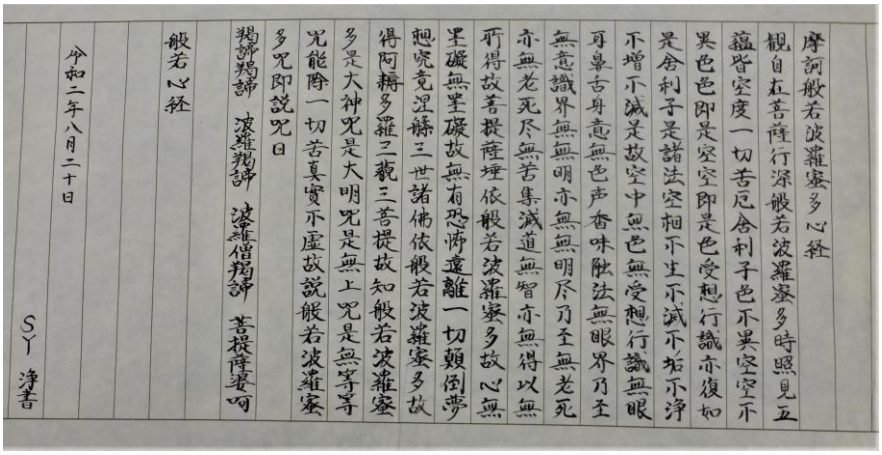
銅　賞

「九成宮醴泉銘」
山形刑務所　雅山
選評　楷書の基本といわれる古典を忠実に格調高く臨書している。


九成宮醴泉銘　　秘書監檢校侍中鉅鹿郡公臣魏徵奉勅書
維貞觀六年孟夏之月　皇帝避暑于九成之宮此則隋之仁壽宮也冠山抗殿絶壑為池跨
水架楹分壕疎闢高閣周建長廊四起棟宇膠葛臺榭參差仰視則迭遞百尋下臨則崢嶸千
仞珠璧交暎金碧相暉照灼雲霞蔽虧日月觀其移山迴澗窮奉極侈以人從欲良足深允至
於炎景流金無鬱蒸之氣微風徐動有淒清之涼信安體之佳所誠養神之勝地漢之甘泉不
能尚也　皇帝爰在弱冠經營四方遠乎立年撫臨億兆始以武功壹海內終以文德懷遠人
東越青丘南踰丹徼皆獻琛奉贄重譯來王西暨輪臺北拒玄闕並地列州縣人充編戶氣沖
牛和近安遠肅群生成遂靈貺畢臻　　無太子率更令勃海男臣歐陽詢奉勅書
雅山臨書

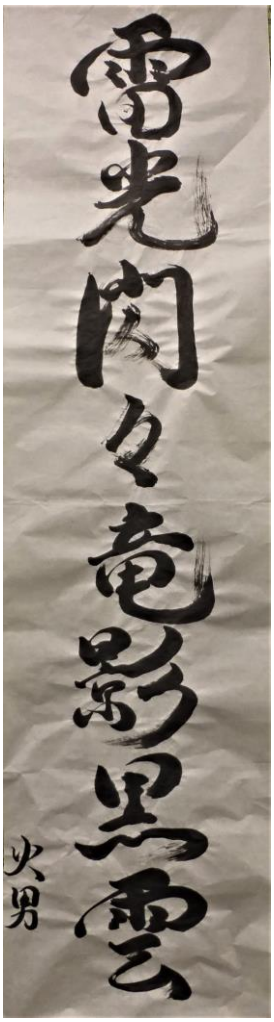


「臨　雁塔聖教序」
盛岡少年刑務所
玉石（I・M）
選評　伸びやかな筆線、懷の広い字形を良く表現している。


摩訶般若波羅蜜多心経
観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舎利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舎利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不増不減是故空中無色無受想行識無眼
耳鼻舌身意無色声香味触法無眼界乃至
無意識界無無明亦無無明尽乃至無老死
亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等
咒能除一切苦真実不虚故説般若波羅蜜
多咒即説咒曰
羯諦羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提薩婆訶
般若心経
令和二年八月二十日
SY　浄書

「般若心経」
福島刑務所　S・Y
選評　一字一字に心を込めて浄書している。

佳　作

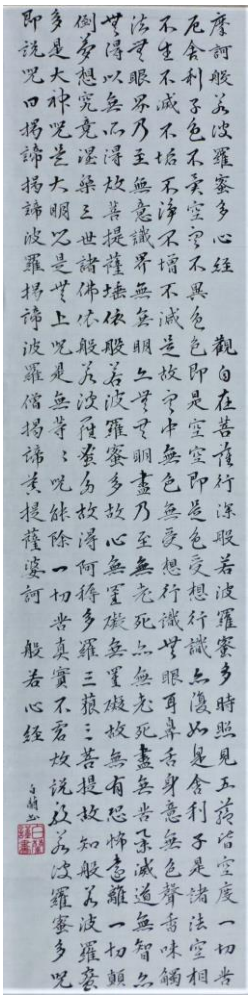


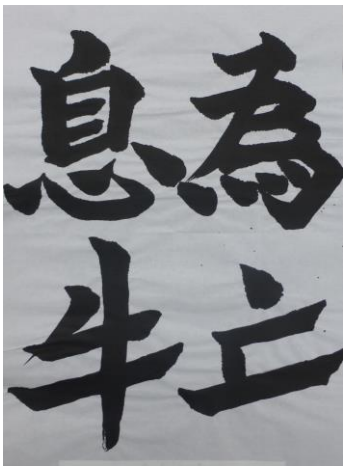
「雷光閃々竜影黒雲」
秋田刑務所　火男

「冬嶺秀孤松」
宮城刑務所　舞吾

「魂願成就」
福島刑務支所　S・R

「般若心経」
宮城刑務所　白蘭

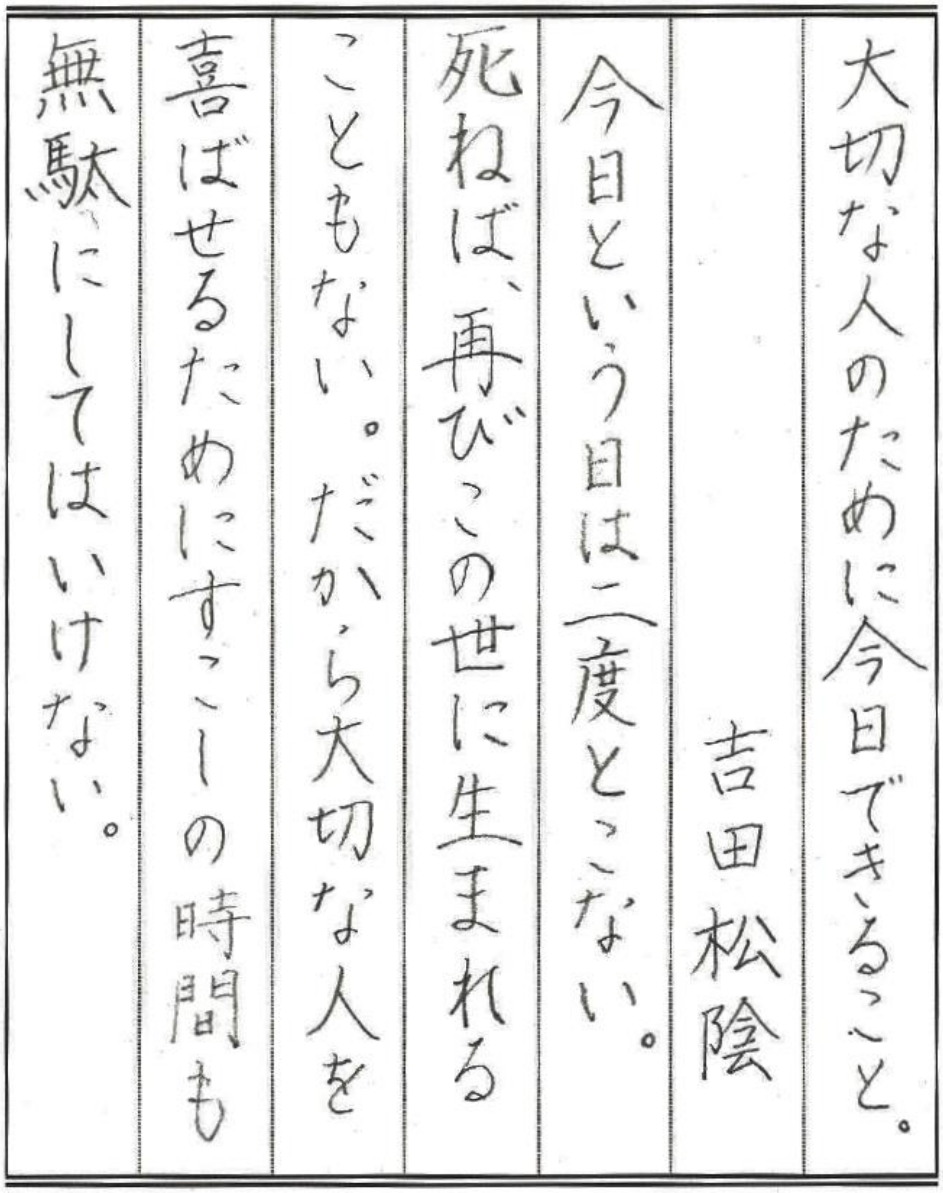




「臨　牛蕨造像記」
盛岡少年刑務所　M・Y

《 硬 筆 》

金　賞



大切な人のために今日できること。

吉田松陰

今日という日は二度とこない。
死ねば、再びこの世に生まれることもない。だから大切な人を喜ばせるためにすこしの時間も無駄にしてはいけない。

「大切な人のために今日できること。」

山形刑務所　M・N

選評　一字一字を丁寧にしっかりとまとめた作品。

銀　賞

継続は力なり

本物の自信は、毎日コツコツ積み重ねた自分の経験から生まれるもの。小さなことでも続けていけば、それは必ず自分の力になる。未来を信じ、地道に続けていくことが、本物の自信や心の強さにつながる。

「継続は力なり」
福島刑務支所　M・M
選評　線が力強く作者の意志が感じられる作。

銅　賞

この世で
最も不幸な人は
感謝の心の
ない人である。

「感謝」
秋田刑務所　K・S
選評　伸び伸びとして構成も良い作品。

佳　作

愛

鷹の運転手

なかなか手紙も書けませんがいつも気にかけている事だけ忘れないで下さい。身体に気をつけて、しっかり反省して下さい。

「愛」
盛岡少年刑務所　T・Y

生きる

生きているということ
今、生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
人を愛するということ
いのちということ

「生きる」
福島刑務支所　R・M

盲目であることは
悲しいことです
けれど、目が見えるのに
見ようとしないのは
もっと悲しいことです

ヘレン・ケラーのことば

「ヘレン・ケラーのことば」
宮城刑務所　力風

書画部門審査総評

【絵画】

今年は例年になくレベルの高い作品が多く、見ごたえのある審査をさせていただきました。指導に当たられた各刑務所の皆様に感謝と敬意を表します。

宮城県芸術協会運営委員
枡澤　怜

【毛筆】

今年は例年にも増して出品数が多く、内容も素晴らしい作品が多かった。作品の大きさも半切作品が多く、多字数の努力作が多数を占めた。半紙作品の中にも本来ならば入賞に値する作品があったので惜しまれる結果となった。

東北書道会副会長
鈴木霽月

【ポスター・カレンダー】

ポスターもカレンダーも良いものが多く選ぶのに悩みました。多くの人に知らせることが目的です。目立つ様にスッキリと仕上げることの大切さを考えながら選びました。ポスターにとり、レタリングされた文字は大切です。その点で残念な作品がありました。

宮城県芸術協会運営委員
鈴木智枝

【硬筆】

作品の題材・内容に、作者が日頃の思いを込めて真剣に集中して丁寧に書いている姿が感じられた。

東北書道会副会長
鈴木霽月

編　集　後　記

本年度も、みちのく書画文芸コンクールとして書画作品及び文芸作品の応募を募りましたところ、各施設からこれまでと変わりなく多数の作品が寄せられ、本書画文芸作品集の発刊の運びとなりました。

文芸作品については、御審査を賜りました先生方の多大なるご協力のもと、各分野において金賞、銀賞、銅賞及び佳作作品を選定することが叶いました。

紙面の都合上、一部しか掲載することができないことが残念です。

末筆になりましたが、本誌の刊行に当たり、御審査と御指導を賜りました先生方に、誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

「みちのく」成人編第４１号
令和３年３月発行

編集発行　仙台矯正管区第三部
〒984-0825　仙台市若林区古城３－２３－１
TEL　０２２－２８６－０１７８